

Scotland と York を訪問して

国際大学 GLOCOM を中心とするメンバーが、平成 29 年度の厚労省老健事業として若年性認知症を含む認知症の人の特性や能力を活かした新たな就労や社会参加に関する調査を行っています。この事業は新たな就労につながる体制や地域での活躍の場の創設に資する手法および好事例等を整理し、その結果を国内で展開する方法を確立することを目的としています。調査では海外事例の収集と分析を行うことになっており、11 月末から 12 月初めにかけて、英国(エジンバラ・ヨーク・グラスゴー)を訪問してきました。分析を含めた詳細は年度末の報告書に向けて整理していく予定ですが、以下では特に印象に残った点について記したいと思います。

1. 研究者とともに

最初に訪問したのは、スコットランドのエジンバラ大学で行われている研究会 “E-CRED seminar on co-production & research” です。ECRED (Edinburgh Centre for Research on the Experience of Dementia)(*1)には、認知症に関わるさまざまな分野の研究者、認知症の当事者である本人、認知症支援に携わる実務家が参加しています。訪問した日も、グラスゴーの認知症当事者である James McKillop さんが参加されていました。

(*1) <https://www.ed.ac.uk/health/research/e-cred>

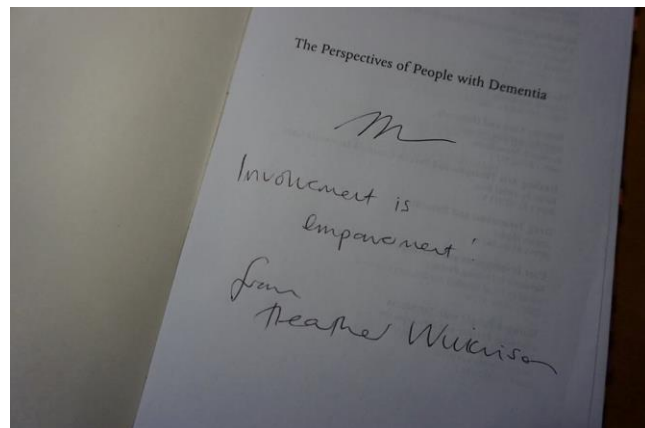
訪問した日の議題の一つは、スコットランドの認知症当事者グループである The Scottish Dementia Working Group Research Sub-group が作成した”Core principles for involving people with dementia in research”(*2)です。この小冊子には、研究に認知症の当事者の人に参加してもらうにあたっての 6 つの基本原則が記されています。

(*2) <http://www.lifechangestrust.org.uk/sites/default/files/publications/Core-Principles.pdf>



研究会では、この小冊子の背景やニーズを制作した側のメンバーである James さんが説明し、全体の司会進行も James さんが行っていました。研究者たちと認知症当事者である James さんとが、「研究」という共通のテーマに対してまったく平等に、どちらかという James さんがイニシアチブを取りながら議論を行っている様子は、認知症の本人が、その人の特性に合わせて、自分たちの思いを社会に反映させていく社会参加の一つの姿であるのではないかと感じます。





研究会の後に、James さんも寄稿している”The Perspectives of People with Dementia: Research Methods and Motivations”(*3)の編著者であるエジンバラ大の Heather Wilkinson 教授にもお話を伺いました。Wilkinson 教授はそのとき「実は新しい研究助成が取れたのよ」と嬉しそうにお話されていました。その助成では、研究提案の中に認知症当事者の方が含まれており、同時に、研究の実施においても認知症の当事者の皆さんに関与していただくことになっているとのことでした。著書にサインを書いたいただいた言葉通り、”**Involvement is Empowerment**”が実際に行われているのです。

(*3) <https://www.amazon.com/dp/1843100010/>

2. 事業者とともに

エジンバラでは、2017年4月に京都で開催された認知症に関する国際会議 ADI2017 にも来ていた。Andy Hyde さんにもお話を伺いました。Andy さんは認知症にやさしい街づくりのために交通事業者を対象にした取り組み Upstream(*4) の主催者の一人です。

(*4) <http://www.upstream.scot/>

Upstream は、交通のどこに課題があるかについて話しやすくするツールを開発しています。また、交通に関する認知症当事者の声を届ける役割(*5)も担っています。Upstream は、認知症当事者の思いと交通事業者の思いをつなぐ役割を担っているのです。

(*5) <http://www.upstream.scot/resources/>



3. 自分たちの声を届ける

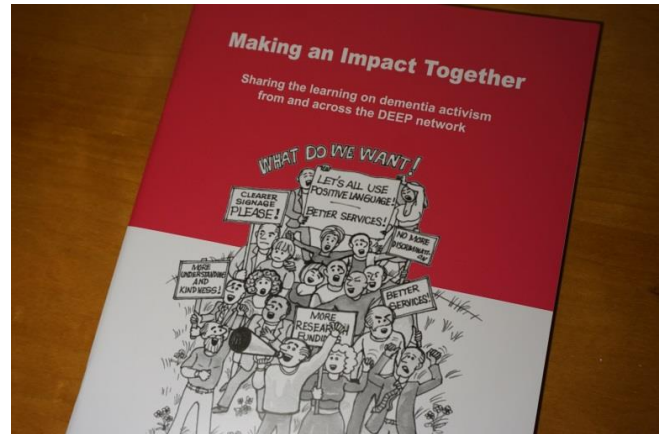
英国中部に位置する人口 20 万人ほどの街ヨークでは、認知症当事者グループである”York Minds and Voices”のみなさんにお話を伺いました。みなさんは月に一度、集まって、「ヨークという街がこうであったら素敵ね」という話をしています。この日、この場所に集まってくださったみなさんはほとんど歩いて来られる距離にお住まいのみなさんでした。集まりでは、誰もが等しく自分の話したいタイミングで話ができるように、みなさんは小さなはがき大の黄色いカードを使っています。



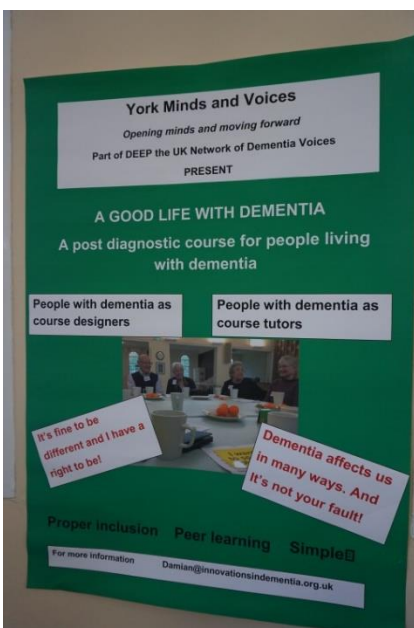
ヨークの Minds and Voices のような集まりは、英国全体で 90 ほどあり、DEEP(The Dementia Engagement and Empowerment Project)(*6) というネットワークを形成しています。ヨークで使っているこの黄色いカードの裏には、DEEP を後ろから支える Innovation in Dementia CIC(*7)と DEEP へのコンタクト先が記載されており、カードを使いながらネットワークを他の街や街のさまざまな人に拡げていく仕組みが組み込まれています。

(*6) <http://dementiavoices.org.uk/>

(*7) <http://www.innovationsindementia.org.uk/>



ヨークの Minds and Voices の人たちが今年から来年にかけて取り組んでいるのは、認知症と診断された後のサポートに関わる活動です。Minds and Voices では、これを” A post diagnostic course for people with dementia”として、どのような講座の内容があれば「認知症とともによりよく生きる」(A Good life with dementia)が実現できるか、そこに自分たちはどのように関わるかを話合っています。これは Minds and Voices の由来、”Opening minds and moving forwards”を象徴する活動なのです。



(文責:認知症フレンドリージャパン・イニシアチブ 岡田誠)

※本調査は、平成29年度老人保健健康増進等事業追加募集採択事業「若年性認知症を含む認知症の人の能力を効果的に活かす方法等に関する調査研究事業」として国際大学が採択された事業の一環として行っています。